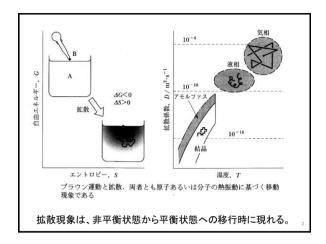
エネルギー輸送概論 固体内の輸送(拡散現象) 担当: 橋爪

第1回. 固体内拡散の原子論 第2回. 拡散方程式と解析解 第3回. 各種の拡散現象 第4回. 追加説明等



拡散方程式 Diffusion equation

フィックの第一法則 Fick's first law

1次元では、

$$J = -D\frac{\partial C}{\partial x}$$
 (2·1)

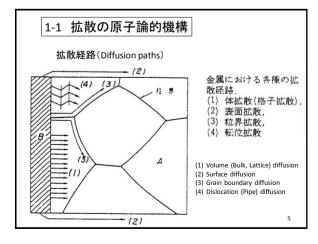
J: 拡散物質の流束 (mol/m²/sec)

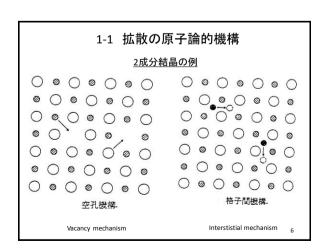
C: 拡散物質の濃度 (mol/m³)

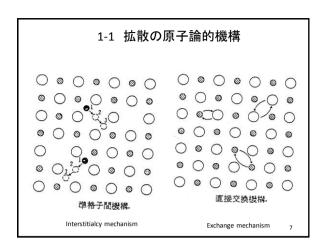
x:座標(m)

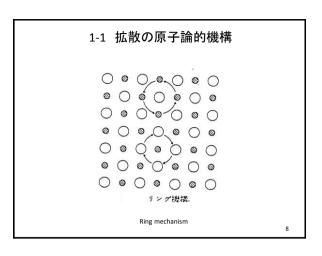
D: 拡散係数 (m^2/sec)

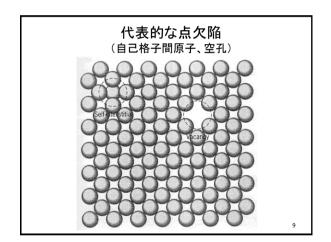
エネルギー輸送概論 固体内の拡散 第1回 拡散の原子論(Atomic theory of diffusion) 液体、気体中の分子(微粉体)の拡散→ブラウン運動 固体中の原子、イオン、点欠陥の拡散→酔歩理論 (Random walk)

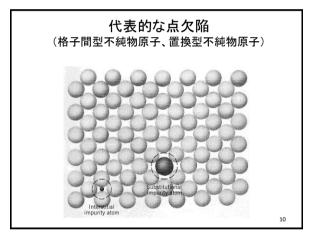


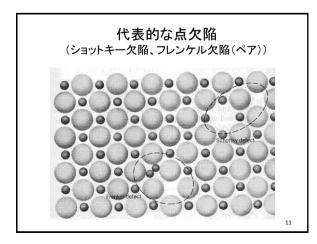


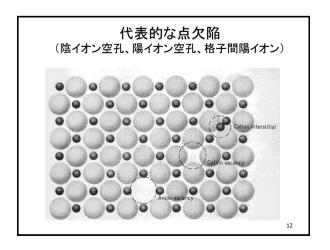


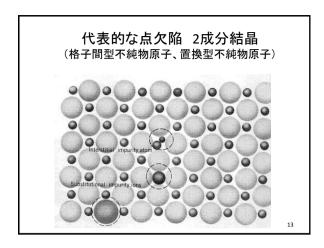


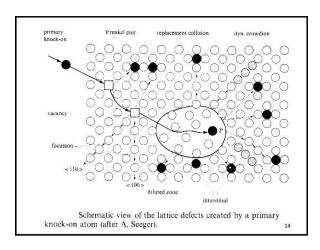


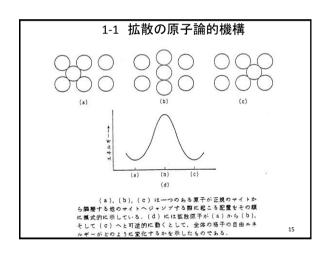


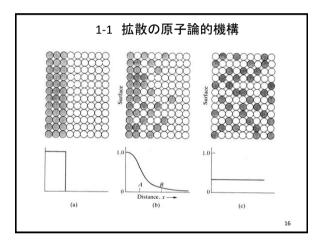


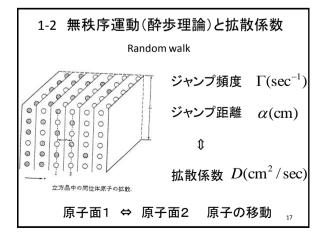












原子面1 原子面2 $n_1 (= c_1 \alpha)$ $n_2 (= c_2 \alpha)$ 拡散原子密度 (個/cm²) 時間 Δt に 面1 \rightarrow 面2 移動した原子数 $=\frac{1}{2}n_1\Gamma\Delta t$ 移動した原子数 $=\frac{1}{2}n_2\Gamma\Delta t$

時間 Δt に 面2 \rightarrow 面1

1-2 無秩序運動(酔歩理論)と拡散係数

従って、拡散流束」は

$$J = \frac{1}{2}(n_1 - n_2)\Gamma = \frac{1}{2}(c_1 - c_2)\alpha\Gamma$$

であり、また、

$$c_1 - c_2 = -\alpha \frac{\partial c}{\partial x}$$

なので、結果として

$$J = -\frac{1}{2}\alpha^2 \Gamma \frac{\partial c}{\partial x}$$
 (1.1)

19

フィックの第一法則との比較により、

$$D = \frac{1}{2}\alpha^2\Gamma \tag{1.2}$$

同様に、2次元では、
$$D = \frac{1}{4}\alpha^2\Gamma$$
 (1.2)

3次元では、
$$D=rac{1}{6}lpha^2\Gamma$$
 (1.2)"

[例] 900℃、γ-Fe中の炭素(ジャンプ頻度の目安として)

$$D \approx 10^{-6} \,\mathrm{cm}^2 \,/\,\mathrm{sec}$$

とすれば、

 $\alpha \approx 10^{-8}$ cm

$$\Gamma \approx 10^{10} \, \text{sec}^{-1}$$

固体中の原子の振動(Debye frequency)

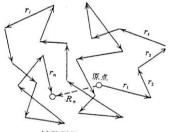
$$\approx 10^{13} \, \text{sec}^{-1}$$

~103回の振動で1回ジャンプ

1-3 酔歩理論

平均移動距離と拡散係数の関係

 $oldsymbol{R}_n$ n 回ジャンプ後の原点と最終位置を結ぶベクトル



拡散原子の random walk.

 $\overset{\mathbf{\rho}}{R}_{n}=\sum_{i=1}^{n}\overset{\mathbf{\rho}}{r_{i}}\tag{1.3}$

単純平均 → 移動距離=0 2乗して平均をとる。

$$\left| \stackrel{\rho}{R_n} \right|^2 = \stackrel{\rho}{R_n} \cdot \stackrel{\rho}{R_n} = \sum_{i=1}^n \stackrel{\rho}{r_i}^2 + 2 \sum_{j=1}^{n-1} \sum_{i=1}^{n-j} \stackrel{\rho}{r_i} \cdot \stackrel{\rho}{r_{i+j}} \quad \text{(1.5)}$$

$$R_n^2 = \sum_{i=1}^n \hat{r}_i^2 + 2 \sum_{j=1}^{n-1} \sum_{i=1}^{n-j} \left| \hat{r}_i \right| \left| \hat{r}_{i+j} \right| \cos \theta_{i,i+j} \quad \text{(1.6)}$$

立方晶系 $\rightarrow r = -$ 定

$$R_n^2 = nr^2 + 2r^2 \sum_{j=1}^{n-1} \sum_{i=1}^{n-j} \cos \theta_{i,i+j}$$

$$= nr^2 \left(1 + \frac{2}{n} \sum_{j=1}^{n-1} \sum_{i=1}^{n-j} \cos \theta_{i,i+j}\right)$$
(1.7)

亚内值

$$\overline{R_n^2} = nr^2 (1 + \frac{2}{n} \sum_{i=1}^{n-1} \sum_{i=1}^{n-j} \cos \theta_{i,i+j})$$
 (1.8)

24

ランダムジャンプであれば第2項=0

$$\overline{R_n^2} = nr^2 \tag{1.9}$$

$$\sqrt{\overline{R_n^2}} = \sqrt{n}r \tag{1.10}$$

[例] 950°C、v-Fe中の炭素の平均侵入距離

$$\Gamma \approx 10^{10}\,\text{sec}^{-1}$$

$$\alpha \approx 10^{-8}$$
 cm

とすれば、1秒間に 1m 移動することになるが、(2.10)式より、正味の侵入距離は、

$$\approx 10^{-3} cm$$

となる。

26

Dと酔歩の関連

(1.9)式より

$$\overline{R_n^2} = nr^2$$

1次元では、(1.2)式より $D = \frac{1}{2}\alpha^2\Gamma$

zzr, $n = \Gamma t$ rable, $r = \alpha$ beta tike.

$$\overline{R_n^2} = nr^2 = 2Dt$$
 (1.11)

1次元における、平均移動距離と拡散係数の関係

Dと酔歩の関連

同様に、2次元における、平均移動距離と拡散係数の関係

$$\overline{R_n^2} = nr^2 = 4Dt$$
 (1.12)

3次元では、

$$\overline{R_n}^2 = nr^2 = 6Dt$$
 (1.13)

28

三次元の酔歩(fcc) トレーサーのジャンプ(自己拡散)

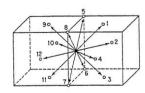


図 2·10 矢印は fcc 格子上で の 12 個の可能なジャンプ ベクトルを示す。

各原子の平均ジャンプ頻度を Γ とすれば、 δt の間のジャンプ回数 $\Gamma \delta t$ は、 最近接サイト数 12、そのサイトが空孔である確率 p_r を用いて次式で与えられる。

$$\Gamma \delta t = 12 p_{v} w \delta t \qquad (1.15)$$

__

25

wは、最近接サイトに空孔がある原子のジャンプ頻度。

原子面1から原子面2へのトレーサーの流束 J_{12} は、原子面1内のトレーサー数 n_1 として、

$$J_{12}=4n_1p_{_{v2}}w_{12}$$
 தெழ்கும் இது

逆方向の流束 J_{21} は、 原子面2内のトレーサー数 n_2 として、

$$J_{21} = 4n_2 p_{v1} w_{21}$$

純粋金属中では、
$$w_{12}=w_{21}, p_{v1}=p_{v2}$$

トレーサー密度は、
$$n_1 = \alpha c_1 = (a_0/2)c_1$$

正味の流束は、

$$J_{12} - J_{21} = J = 4 \alpha p w (c_1 - c_2)$$
 (1.16)

一方、
$$c_1 - c_2 = -\frac{a_0}{2} \frac{\partial c}{\partial x}$$
 なので、

31

$$J = -a_0^2 p_v w \frac{\partial c}{\partial x}$$

となり、空孔機構における拡散係数は、

$$D = a_0^2 N_v w {(1.17)}$$

 $N_{_{\scriptscriptstyle V}}$ 空孔分率

格子間機構では、

$$D = \gamma a_0^2 w {(1.18)}$$

32

拡散の原子論的解釈

1-4 Dの計算

(2.17)、(2.18)式 : 拡散係数D は、ジャンプ頻度w、空孔分率(濃度) N_v に依存。

空孔の平衡濃度

$$N_{\nu}^{e} = \exp(-\frac{\Delta G_{\nu}}{RT}) \tag{1.24}$$

$$=\exp\frac{\Delta S_{\nu}}{R}\exp(-\frac{\Delta H_{\nu}}{RT}) \tag{1.25}$$

33

鞍点エネルギーの名前の由来 35

空孔形成エネルギー E_F , 形成エントロピー S_F およびエントロピー項の測定値

金属	$E_F(eV)$	S_F	A
Al	0.75	2.4 k*	11.0
Cu	1.1	1.5 k	4.5
Ag	1.09	1.5 k	4.5
Au	0.94	1.0 k	2.7
Pt	1.5		_
w	3.3		-

* k はボルツマン定数

34

ジヤンプ頻度 w の計算 鞍点 (Saddle Point) 最入型原子のボテンシャルエネルギーの等高報 1. 2が安定投票、3か報点である 成人型原子の移動剤目とボテンシャルエネルギーの等高報 1. 2が安定投票、3か報点である

Boltzmann factorで与えられる

$$\frac{n_m}{N} = \exp(-\frac{\Delta G_m}{RT}) \tag{1.27}$$

 n_m : 鞍点近傍に位置する原子数N: 全原子数

$$w = \frac{n_m \nu}{N} = \nu \exp(-\frac{\Delta G_m}{RT}) \tag{1.28}$$

vには通常Debye frequencyをとる。

格子間機構では AS AH

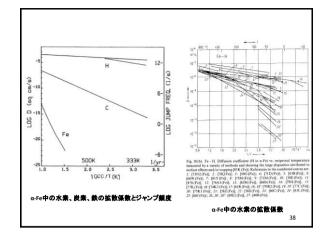
$$D=\gamma a_0^2 \nu \exp{\frac{\Delta S_{\scriptscriptstyle m}}{R}} \exp{(-\frac{\Delta H_{\scriptscriptstyle m}}{RT})} \end{tise}$$

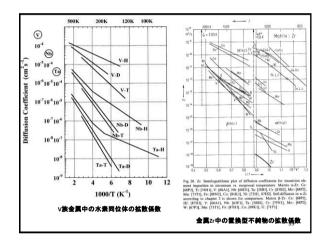
空孔機構では

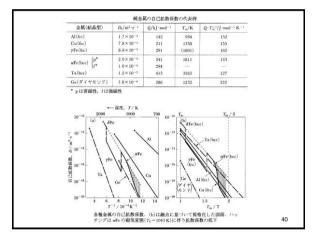
$$D = a_0^2 v \exp \frac{\Delta S_f + \Delta S_m}{R} \exp(-\frac{\Delta H_f + \Delta H_m}{RT})$$
 (1.31)

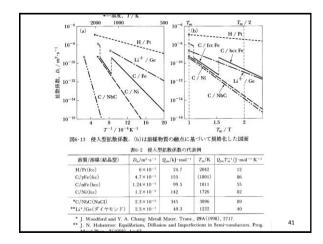
いずれにしても

$$D = D_0 \exp(-\frac{Q}{RT}) \tag{1.32}$$









今回のまとめ

- 〇 固体内拡散の原子論的機構(空孔機構、格子間機構)
- 〇 酔歩理論
- 拡散係数を決定するパラメータ
- 〇 拡散係数の温度依存性
- 〇 拡散係数の前指数因子(振動数因子)と活性化エネルギー
- 〇 各種の拡散係数